

# 新 知 故 温

昨年12月に亡くなられた永井秀文さんは、協会誌「ステージサウンドジャーナル」のスタート初期にいくつかのエッセーを書かれています。レコーディング・エンジニアとして音そのものに対峙する中でお考えになったあれこれを、さりとした筆致で書かれていますのでご紹介します。

(編集部)

## 音響家の独り言

永井 秀文

日本舞台音響家協会  
「ステージサウンドジャーナル」Vol.4 No.18&19  
平成15年(2003年)9月、12月発行号より転載

### 【著者紹介】

永井秀文

(株)エピキュラス 事業開発室 / 1級舞台機構調整技能士 / 東京都舞台機構調整技能検定協議会 首席検定委員 / 日本舞台音響家協会 技能検定担当理事



### 独り言 1 の 1

#### 『ボサノバ』

本年はボサノバが流行した年でもあった。

12月の9日に青山のマンダラで、アレンジャーでピアニストでもある上田力さんのグループの演奏でボサノバのライブレコーディングを行った。

アントニオ・カルロス・ジョビンのチクルスであり、我々にとって二度目の録音である。

ご存知のように、ボサノバの原産国はブラジルである。また、ブラジルといえばリオのカーニバルを思い出す方も多いだろう。そしてカーニバルといえばサンバ……

同じラテンミュージックと言ってもブラジルの音楽とメキシコのそれでは、かなりの違いがあるように感じる。

南米に詳しい友人に聞いてみたところ、それはスペイン人とポルトガル人の気質に関係するらしい。

スペイン人は民族の純潔を重んじる国民性で、メキシコでは原住民のインディオは別にしてアフリカから奴隷を労働力として連れてくることをそんなにやらなかったようだ。

ポルトガル人はあまりこだわりが無く多くのアフリカからの奴隷を農耕に使用したそうである。そしてその結果が、どちらかというところヨーロッパの香りを色濃く残すメキシコの

スパニッシュ音楽と、彼らがアフリカから持ってきた楽器を多用したサンバやボサノバの音楽との違いを大きくしているようである。

そういわれてみれば、メキシコの市内を歩いているアフリカ系の人に会う機会は少ない。

2001年12月18日

## 独り言 1 の 2

### 『音楽の歴史と録音機』

音と音楽に関わり始めてからすでに2X年の月日が過ぎた。

録音の歴史について調べる機会があったので、少し書いてみた。

プロの方々には釈迦に説法かもしれないが……

録音の歴史は1877年にトーマス・エジソンがシリンダ方式の録音機を発明したことに始まる。錫箔を巻き付けた銅製の円筒に大きなメガホンで振動板に取り付けられたカッティングの針を直接振動させて信号を刻んだものである。

後にエミール・ベルリナーによりディスク方式が考案され大量生産が可能になった。

しかしこのアコースティック方式の周波数特性は、100Hzから4000Hz位であったようである。この音域でまともにカバーできるのは人間の声位のもので、オーケストラの録音などは、とてもという状態だった。(後にいろいろな改良が加えられオーケストラの録音商品もいろいろ発売された)

電気を使用したレコードの録音は、アコースティックのレコードが発明されてから約50年も後のこととなる。

もう一つの技術革新、テープ録音の始まりは1898年デンマークのワルデマー・パウルセンが特許を取得している。しかし、当初録音媒体として使われたのは鋼鉄線というワイヤーであり、音質はかなり貧弱だったようである。今の形に近いものができたのが、1935年に最初のテープレコーダ「マグネトフォン」の実用機がつけられた。ドイツBASF社が紙をベースにしたテープを、AEG社がレコーダを開発した。原理的には現在のアナログオープンレコーダとなんら変わらない物だった。

上記をよく読むとテープ式のレコーダの開発より電気を利用したレコードの録音の方が時期が早かったという事実が気がつかれると思う。初期のレコードの録音は、テープレコーダに録音をせずにダイレクトカッティングで行われていたのである。

録音の歴史の中でもう一つ欠かすことのできないものは、トーキー映画である。初めてのトーキー映画は、1929年に公開された『ジャズシンガー』といわれている。映画のサウンド・トラックは「光学録音方式」である。マイクで拾って電気に変換された音は、電球の明暗に換えられフィルム上のサウンド・トラックに光学録音される。

1940年に公開されたディズニーのアニメーション映画『ファンタジア』はこの技術を使用したサラウンドのカラー映画である。第二次世界大戦終結の5年も前の話である。録音技術の歴史を考えるうえで、アメリカの映画とヨーロッパのラジオ放送の影響は避けて進むことができない。

録音技術にとってラジオ、トーキー映画の登場が第一の変革のポイントとすると、第二のポイントは1950年代のテープレコーダの普

及とも言えるだろう。

ドイツで開発されたテープレコーダの技術は、第二次大戦後アメリカやイギリスに持ち込まれ1948年にはAmpexにより録音機が、3Mによって磁気テープが発表されることになる。磁気テープの登場により、編集ができるようになり、後には、多重録音技術が生まれることになる。

2002年4月4日

## 独り言 2 の 1

### 『祭りと戦い』

最近暇なので音楽の原点はどんなところなのだろうか等と考えていた。

原始時代のお祭りで、神様にお祈りを捧げたりするときなど、何かを叩いたり声に出して歌ったりしていても不思議はないような気がする。この手法は古事記の天岩戸の一見(ママ)でも使われていたようだし、現代のゴスペルもまさにこの姿であろう。

また、つい最近まで進軍ラッパなどという言葉があったが、戦いの時なども士気を煽ったり足並みをそろえたりするのに音楽が使われていたようである。

集団の気持ちをそろえる目的であれば、それは多くの人に解りやすいものでなければならぬ。

私は宗教に関心は無く、また戦いが好きなわけでもないが、わかりやすい音楽が好きである。

でも、ここ最近、難しい音楽が高級そうに持て囃されたりもしていないだろうか……？

2002年10月5日

## 独り言 2 の 2

### 『音楽と気候風土』

気候風土と音楽にはかなり深い関係があるように感じる。

また、その関係の仲立ちをしているものが建築であろうとも思う。

ヨーロッパ大陸でも北寄りに位置するドイツなどは冬の寒さがかなり厳しく、建物も外気との遮断が必要とされる。

比較的大きな空間をしっかりとした構造物で取り囲むと結果的に残響時間は長くなる。

長めの残響の中で楽しめる音楽の要件を考えると、テンポが早すぎないこと、管弦楽器等の豊かな響きが付加されて音色が良くなる楽器を多用することなどが考えられる。

これらは、ベートーベンなどドイツ音楽の特色と一致するものが多い。

逆に南ヨーロッパ地方は気候も温暖で過ごしやすい。

建築も、材料こそ石材が多用されてはいるが、風の通りを考えてか開放的な作りのものが多い。

必然的に、北ヨーロッパの建築に比べると残響は短めになる。

多少テンポが速くなっても明瞭性を保ち、また、金管楽器や打楽器のパーカッシブな演奏も迫力ある効果を発揮する。

近代のフランス、イタリアなどの楽曲にそのような傾向のものを多く感じる。

このような関連性を感じるのは私だけだろうか。

2003年3月13日